

## 第6回「県政ひざづめ談議」概要

○開催日時：平成20年6月24日 14：30～

○開催場所：道の駅どうし

〔司会〕

ただいまから知事対話『県政ひざづめ談議』を始めさせていただきます。本日の進行役を務めさせていただきます県の広聴広報課長、田中でございます。よろしくお願いいたします。

はじめに横内知事からごあいさつをお願いいたします。

〔知事〕

皆さんこんにちは。

それぞれお忙しいと思いますけれども、こうしてひざづめ談議にご出席をいただきまして本当にありがとうございます。これは日頃皆さん方のお仕事だとか、あるいはいろいろな活動をしておられる、そういう経験の中で、県の行政について思いのたけをざっくばらんにお話をさせていただくという会でございますから、是非肩ひじ張らずに、また遠慮しないで、何でもおっしゃっていただければと思います。

こういう役人さん方が私に色々話をしてくる時がありますが、みんな加工して、きれいごとしか言ってこない（笑い）のは余り参考になりませんので、やっぱり本当に飾り気のないというか、皆さん方の本当に本音の声が一番県政に参考になるというふうに思っていますので、是非ともよろしく願い申し上げたいと思います。

道志村も半年に一回ぐらいお伺いをするんですけれども、いつも本当に清流と緑したたる山河ということで、心が洗われるような思いがするわけであります。そして皆さん方のご努力で大変に住みやすい村ができてきた。とりわけ横浜市のほうも非常に心配をして、横浜市民の命の水を作ってくれている水源の里ということで、大変大事にしてくれているということをよく聞いております。

この7月に、全国知事会議というのが横浜であるんです。だから道志の村長も一緒に横浜の市長、中田さんに久しぶりに会って、僕は前からよく知っているんですけれども、またあらためて道志のことをよくお願いをしてこようかというふうに思っているところです。

道志は山梨県の中でも別荘が多い所で、住宅の数の中で別荘の割合が北杜市、それから富士河口湖町、道志、こんなところが割と多いですね。やっぱりそれだけいろんな意味で住みやすいからお住いになる方が多いんだろうと思うんです。

二地域居住ということが言われますけれども、横浜市とかあるいは東京のほうから道志に来てお住いをいただいている方も多いと。今日おいでになっている方にもそういう方が多いと承っております。

そういうような形で横浜市をはじめとして、県内の皆さん方との心の通った交流をしながら、都会の方々は癒しを求めてこの地域においでになり、同時にまたこの地域も若い人が定着できるような活力と、同時にゆとりのある村づくりを進めていくということができたらなと思っていまして、県もそういうことにできるだけのお手伝いをしたいなと思ってきました。

そんなことで今日は「交流で築くふるさとづくり」ということですが、別にこのテーマに限ることはないんですが、何でもよろしいですからご意見があればお聞かせをいただきたいと思いますので、よろしく願いいたします。

〔司会〕

本日出席しております県と道志村の担当者をご紹介します。

まず、県の観光振興、それから都市農村交流の推進を担当しております堀内観光振興課長です。

それから県の農村振興などを担当しております横田農村振興課長です。

道志村の佐藤まちづくり調整室長です。

意見交換会に入りたいと思います。本日は地域づくりを推進している方々と『交流で築くふるさとづくり』をテーマに、地域の情報を発信し、交流人口を増やすにはどうすればよいか。交流拡大を通じた魅力あるふるさとづくりをどう進めていくか。そういう観点で話し合いを進めていきたいと思いますので、忌憚のないご意見をよろしく願いいたします。

限られた時間でございますので、是非参加者全員が発言できるように皆様でご協力をお願いしたいと思います。

それでは発言をお願いいたします。

〔知事〕

これ（「はまっ子どうし」：ペットボトル）は道志の水で、横浜の水道局が出したやつですね。これは売れているんですか。

〔参加者〕

売れているみたいですよ。

〔参加者〕

19年には190万本。

〔知事〕

ということは売上はどのぐらいになるんですか。

〔参加者〕

1本100円としても1億9千万。

〔知事〕

半分ぐらいもらってもね、売上の半分ぐらい・・・。

今1億5千万円ぐらい道志には横浜市がお金をくれているんですね。もうちっともらってもいいかもしれませんね（笑い）。

〔参加者〕

ちょっと調べてみたんですけど、それを実際に製造している所は群馬県の月夜野（つきよの）なんです。道志へそれを作る工場を作ってもらいたいと思ってね、横浜市に働き掛けてはいるんですけど。

〔知事〕

群馬県まで……。じゃあタンクローリーか何かで運んでいくんですか。

〔参加者〕

ええタンクローリーで。

〔知事〕

それはもったいないですね。

〔参加者〕

その経費もばかにならないし、村内から何人かお世話にもなれるからということで働き掛けをしているんですが、なかなか。またその辺も知事さん、中田市長に……。

〔知事〕

そうですね、全くもったいないですね、それは。これは採水地は道志村と書いてあるけど、すぐ下でパイプで取っていますね。

〔参加者〕

大渡というところへ汲みに来て、それから持っていつているんですよ。

〔知事〕

あそこまで汲みに来るんですか。それじゃここで作ったほうが早いよね。

〔参加者〕

僕ら今郷土史を語る会というのを18年からやっています、今までやってきた行事なんかで、今もう全然なくなっているようなものを復活していこうとか、あるいは道志村には神社とか石像仏とか、そういうものがいっぱいあるんですが、そういうものを一つ一つ、道志一物知りの先生がかなり発掘していますのでね、そういうところを勉強しながら実際に歩いてみて、将来的にはやっぱり観光マップみたいな形にまとめて、観光を進めていこうということで、今現在20人ぐらいでやっています。

もう30年以上、40年ぐらい前かな、まだやっている部落も少しあるんですけど、どんど焼きというのをこの向こうの体験農園の広場を使って、今年の1月20日にやったんですよ。それと昔は団子刺しというのが各地であったんですよ、繭玉を作るの。うちなんか昭和44年でお蚕（養蚕業）終わっちゃって、それ以来ほとんどやっていないけど、その2つを合体してここで復活させたんですよ。

余り宣伝もしなかったもんだけんど、それでも延べ100人以上は集まったんですよ。

〔知事〕

どんど焼きというのは昔はあっちこっちでね・・・。あれは小正月にやるんでしたっけね。

〔参加者〕

うちのほうは1月の14日だったんですよ。それで13日が団子刺しの日で、丸い団子の大きなやつでさ、それをどんど焼きの火でかざして、子どもが食べて。そうすれば薬になるんだとかそんなことで、そういうことを今年1月復活しました。

〔知事〕

道志七里っていうのは、これ鎌倉街道の脇街道なんでしょうね、昔からのね。だからやっぱり古い道祖神だとか何だとか、ずいぶんたくさん残っているんだろうと思うんですね。

〔参加者〕

結構残っていますね。

〔参加者〕

やっぱりそういうものを村の人が知らないと、よその人にPRできないですからね。そういう意味で我々の班で色々そういう道祖神であるとか、六道さんであるとか、色々勉強して、そして外部のほうへそれを伝え、また子どもたちにも伝承していくということで今一生懸命やっています。

〔知事〕

大事なことだと思いますね。

〔参加者〕

ちょっとお願いがあるんです。お願いというか、話を聞いていただきたいんですが、今うちの観光協会では横浜市の中学の2年生を対象にしまして、体験学習というのを13年からずっと毎年続けているんです。今のところ学校の都合でしようけれども、春の5月6月しか時間がないんです。

今度それを秋の9月10月あたり、2学期にもしたいなと思って教育委員会とも折衝しているんですけど、そうなってくると人も増えてきますし、色々ありますから、今の道志村の民宿だけだとちょっと大変になってくるんです。

それと学校の方針というか、今、小口で5人とか6人ぐらい、普通民泊のような形にやりたい、お願いしたいという中学校が多くなってきています。ホームステイのような形で。

だからそれをするにはどうしても村としても民宿だとか、色々金の掛かることはなかなか難しいし、今から新しい家を建てるわけにもいきません。南信州の観光公社というのが飯田市にありますけど、あそこの視察をしたところ、あそこは農家で民泊を、県の知事さんの許可でやっているというふうなことをお聞きしましたので、県のほうとしても研究し

ていただきたいと思います。9月辺りになると、村が指定されました「子ども農山漁村交流プロジェクト」の関係もございますから、そういうことが必要になってくると思うんですね。

小さいところで、その家の家族にさせていただいてやっていただくというふうな、ホームステイの型ですから、100人もが重なってくると何十軒かは必要になってきます。それが1週間となると大変だし、中学の場合は、大体二泊三日から三泊四日ぐらいでずっと進めていますけどね。そんなことですから、一つその辺をまた・・・。

〔知事〕

なるほどね。あれは旅館業法か、あるいは環境衛生法か食品衛生法か、その辺の話なんでしょうね。

一応許可みたいなものは民宿の場合取りますよね。それが農家が農作業の片手間に民泊、5、6人、それはもちろんお金を取るから商売にはなるけども、それをやらせてもらいたいということだ。それは・・・ね。

〔参加者〕

食事を出していいか悪いかは、いろんなこともあるでしょうから、村で指導して農家はその方向に持っていくという形にしたいと。今のところ道志村では農家で民泊というのがほとんどありません。全部民宿と旅館業ですから。一つその辺を何とか協力をお願いしたいなど。

〔知事〕

これは長野県の飯田でやってるんですか。

〔参加者〕

南信州観光公社です。飯田市を中心に伊那の辺まで14市町村ぐらいです。あそこ一郡ぐらいありますよね。

〔知事〕

これはちょっと調べてみましょう。分かりました。悪いことじゃないと思いますね。

〔参加者〕

横浜から小学生の森林の間伐の学習ですかね、それも来ましてね。18年から始まっているんですけど、やっぱり父兄が心配になるのは、大勢子どもを集めて入れると夜事故でもありはしないかというようなことで、どうしても小さい形でやりたいというのが多いんですね。

だから心配しなくても、少人数でうちの家族と同じようにしますよということでやれば、かなり効果的かなと思っているんですよ。

〔知事〕

まあ商売でやるとなると色々規制が掛かってくるわけですが、いやそれは商売じゃないと。お金は取っても、それは実費をもらうだけだというぐらいにしておけばよろしいわけですね。

〔参加者〕

そういうことです。新潟県のほうでもどこかそんな村があるようですよ。その辺を是非お願いいたします。

〔知事〕

よくこれ調べてみますね。できるだけやれるように、それはそうですね、分かりました。

〔参加者〕

それに関連して、北海道長沼町という所が同じようなことをやっていますよ。政府のインターネットを見ていましたら、この人も聞きたいというので北海道の長沼町で同じようなことをやってみました。

〔知事〕

そうですね。それも調べてみましょう。

〔参加者〕

稲作体験の会です。私は道志に住んでまだ5年程度です。

たまたま隣にいる道志の米づくりのプロと知り合いになりました。この方は最近まで議員さんをやっておられました。そんな関係もありましてね、道志には休耕田がかなりありまして、これを村づくりの一環として活用したほうがいいんじゃないかと。米づくりの指導は俺がやるから、お前ちょっと人を集めないかというふうな話で実は始まったんです。

例えば今年5月18日に約60人集まって、山梨日日新聞にも紹介していただいたんですけど、大体参加されているのが東京の八王子とか三多摩、横浜、川崎、いわゆる別荘として道志に住んでいる方ですけど、そういう方々が3年続いて来ているんです。去年は25世帯、今年はその25世帯の参加の人たちが口伝てで広げてくれて、まったく宣伝しないで30世帯集まった。

今我々の力量ではこれが限界ですからね。ただニーズはかなりあるんですよ。やっぱり今こういう時期ですから、米を実際自分で作ってみて、それで田植えと草取りと稲刈りやって大体10キロ程度皆さんに暮れにお渡しして・・・。

〔知事〕

今、何反歩ぐらいやっているんですか。

〔参加者〕

1反歩（約1000平方メートル）になりますかね。

〔知事〕

80人でおやりになっていて・・・。

〔参加者〕

まあ60人ですね。

〔知事〕

交替に来られるんでしょうけどね。

〔参加者〕

そうですね。1世帯ですから、子どもも来てね。そういう農業に親しむ、米を自分で作りたいという気持ちは相当あって、やり方によってはもっともっと広がる可能性もあります。我々のところでは手一杯ですが、何とかもう少し広がるものがないのかなど。

何とかまい協力関係が道志の中でもできればね、かなりまだまだ休耕田がいっぱいありますからね。道志でも米作りが改めて見直されている時期ですからね、やる必要があるんじゃないかということ。

それから直接私たちが、まあ全く素人ですけども、自分たちの力で米作りをやって、それが少しでも村のため、村づくりのためになるならばということでやっているんですが、そのきっかけは、率直に言って都留市との合併問題だったんですよ。

合併で小さな村がいろんな意味で主体性がなくなるよりも、何とか自力でもって村が進んでいけるようになるならば、我々の力でも村づくりのために少しでもお役に立ちたいというのが実はきっかけで始めたわけです。率直に言って合併か何かやっていたら決してこういうことに私たちが取り組むようなことにならなかったんだろうと思うんです。自力で、自分たちの力で村を何とかしなければいけない、何とかしたい。せっかく私、川崎からこういうきれいな、自然豊かな所に住んだわけですから、ここで何とか自分たちの手で思いどおりの村に発展させていきたいというようなつもりで進めているんです。この先合併という問題がどうなるか分かりませんが、私たちの希望としては村独自で進められるようなものにしていきたいなという思いは強いんですけどね。

〔知事〕

まあそういう活動が広がればいいですね。1反歩、水田を貸す人はなんぼでもいるでしょうね。

〔参加者〕

いますね。実際に昔ながらの、機械を使わないで、手で植えてもらうのを楽しみに都会から来てくれるわけです。

〔知事〕

じゃあ減農薬でやるんですか。

〔参加者〕

ええ、ほとんど。

〔参加者〕

本当に手で植えるのが楽しい。子どもたちが泥んこになってやるんですね。

〔知事〕

草を取るのがえらいやね、だけどね。都会に働きかければいくらでもいるでしょうね、そういうことをやる人はね。

〔参加者〕

そして例えば八王子からは1時間で来ちゃうんですね、実際車で来ると。朝早く来ますからね。だからそんなに不便ではないですね。

〔知事〕

あと4年後にあの城山インターが圏央道にできるから、もっと早くなるね。30分で来ちゃう。あまり便利になるのがいいかどうか分からんけど・・・。そうですか、なるほどね。それは是非活動を広げてもらいたいですね。

〔参加者〕

道路の関係について知事さんをお願いします。私はここから17キロ下流、神奈川県と埼玉県の間まで4キロぐらいの所に住んでいます。

昨今岩手宮城の大地震がありました。私も小さなお店をやっております、観光協会にも入っています。先ほど知事さんがおいしいねと飲んでいた水を運ぶタンクローリーがどちらを回ってくるかといいますと、神奈川県の相模原を通過して道志へ入ってくるんじゃないかと、中央高速から山中湖のほうをぬけてくるんですね。

私たちは道志川の下流なんですけど、神奈川県と埼玉県の間の方が道志村の玄関だと思っているんですが、観光バスの50人、60人乗りになると、例えば今年春ですと横浜の中学生がバスで来た場合、どうしても中央高速じゃなくて東名を通過して山中湖から入ってくるような形になっちゃうんです。観光面から、そしてもう一つは防災の面から、観光バスが通れるような、カーブが多いですから、そのカーブをちょっと取り除くんでなくて、トンネルでどうにか抜いていただけないかと思っています。

また神奈川県の相模原市の末端では、道志よりも国道413号線が狭いんですね。ですからこちらのほうからは是非神奈川県にお願いして、大型のバスが入れるようにすれば、防災、観光の面でもっと利用者は増えていただけないかと思っています。

〔知事〕

それはおっしゃるとおりでね。あと4年後ですね、城山インターというのができて、圏央道で非常にそこまでは早くなる。そこから先のいわゆる413号というのは、神奈川県のほうはあんまりすっきりしてなくてね。山梨県のほうは割と月夜野のところをうまく改



修していて、まあまあよくなっているんですがね。

〔参加者〕

そこが実は観光バスが通れないことはありませんけど、カーブが多いんですね。

〔知事〕

山梨県のほうにも多いですか、神奈川県の方ですか。

〔参加者〕

山梨県も多いです。神奈川県はもっとカーブがあって狭いんです。

〔参加者〕

神奈川のほうはセンターラインが引いてない部分があるんです。

〔参加者〕

大型バスが来ますと乗用車はちょっと待つというような感じですね。

〔知事〕

まあ神奈川県にとってみれば端っこですからね（笑い）。

〔参加者〕

道志も端っこで（笑）。

〔知事〕

山梨県にとっては道志のそっちは玄関口ですからね（笑い）。しかしなかなか神奈川県にとってはね。

〔参加者〕

役場から上流域は、都留市、山中湖村とか村内へ勤めている方も多いんです。私たちの地区は生活面も神奈川県です。そして例えば東京都八王子市、あるいは神奈川県の相模原市、同じ神奈川県の厚木市に1時間、1時間半掛けて通勤しているんです。

そうするとどうしてももう少し道路はどうにかならないのかということになるんです。そうすれば、例えば八王子市は文化都市で学校、大学がいっぱいありますね。道志の高校生は最近、どうもバスの便が悪いですから吉田、都留、大月へ両親が何人かで担当して送っていくようです。

もう一つは、大学生になると八王子市には文化都市で大学がいっぱいありますから、高校を卒業した子どもに車を与えて免許を取らせれば1時間で大学へも通えるんですね。そうでなければ下宿になっちゃうんです。ひどいともう高校から、クラブをする子どもなんかは富士吉田とか都留、あるいは大月で下宿なんですね。最近は少ないんでしょうけど。両親の経済的負担も相当あります。ですから道路をお願いしたいと思っているんです。

〔知事〕

よく神奈川県知事に言っておきましょう（笑い）。相模原市が政令指定市になれば、今度相模原が管理をすることになりますね。そうすると相模原にとってはまさに大事な道になるでしょうね。まあよくこれは知事さんに、松沢さんによく言っておきます。413号ですね。

〔参加者〕

知事さん、お願いばかりですがね。道志じゃお願いしかないんですが、このクレソンの栽培が日本一であって非常に生産量が多いわけですけど、それが今頓挫しまして、若い後継者がなかなか出てこないということもあります。いずれにしても作りにくい、要するに基盤整備がよくできていないということですね。というのは田んぼはみみずが這い歩くような水路でできてますが、クレソンの場合は水がこんこんと入らなければだめなんですね。水が田の中を流れなければだめなんです。だからそれをするには道志川の水を田んぼに入れる今までの水路をもっと改良して、基盤整備をして、その水が田んぼのある地帯にぼーんと流れていく。そういうことをしないとだめなんです。

したがって水を止めて入れるその堰が必要にもなってきます。そういう基盤整備を農業改良事業というか、そういうものでしていただかないと、この日本一のクレソンが頓挫するというような方向なんです。

そうするともっともっと若い人が好きにできる農業の進展ができると思うんです。道志村の唯一の換金作物だしね、産業ですから、今の道志だけでも全部で2億以上の金が取れているんですからね、クレソンだけで。クレソンはもっともっと伸びると思うんですよ。それにはどうしても水路、この基盤整備が必要だなと思っています。

〔知事〕

今、中山間地域整備事業というものを20億円ぐらい掛けてやっているんですけども、その中には入っていないということですか。

〔農村振興課長〕

細かい場所はちょっと分かりませんが、恐らく入っていれば別に農務事務所のほうに相談していただければできると思うんですけども、できない場合でも県単事業とかそういうのがありますので、役場を通じて都留の農務事務所のほうへ来ていただければ。

〔参加者〕

そうですね。一つその節はよろしく・・・。

〔参加者〕

中山間は何度か予算が来ております。

でも行政が、村の行政と話をしてやったんですけども、法（ノリ）面がどのぐらいとか何とかで、余りにも規制がちょっと厳し過ぎるんじゃないかと。

どなたが考えても、これからは軽トラがせめてすれ違えるぐらいの農道が欲しいわけですね。私たちは最初は3m50か4m道路ができると考えていました。ところが最終的には法面を除いて側溝を入れますと2mか2m50になっちゃうんですね。そうすると上から車が下ってきた、下から登ってきたでは、どっちかが待っているのではなくてバックをしなければならない、退避場へ。平らな所ならばそれもできるでしょうけど、かなり傾斜がある部分なんです。

とにかく道が狭過ぎる。そして行政のほうから最終的には地域に判断に任せるということで私たちはやむなく、もうちょっと広い道路ができないもんかということで、結論的には断念をせざるを得ませんでした。

ですからせっかく役場のほうで尽力いただいて、お金は来るんですけど、余りにも規制が厳しいので、その辺、もう少し山間地に合った枠組作りみたいなものがないのかと思います。そうすればもう少し農地も活用できるんじゃないかと。中には、いやそれでもいいから作ろうという方もいましたけど、私たちとしては全体的な意見としてちょっとそれは今回は断念しましょうというような形になりました。

〔農村振興課長〕

高速道路を作るわけじゃないので、勾配がいくつでなければだめとか、そういう決まりはないんですよ。ですから今事業をやっているんでしたらば、先ほどの農務事務所のほうへちょっと相談してもらおうか、私のところに来てもらっても間接的にはできますけれども。

〔参加者〕

うちの地区は一応図面も描きましたけども、結局今回は断念しましょうということで工事はしておりません。

〔農村振興課長〕

ほかの事業もありますので、今後検討なされたらいいかと思います。

〔参加者〕

そうですね。はいわかりました。

〔参加者〕

トンネルの件ですけども、実は昨日道志村の消防団の旅行で愛知県の防災センターというところに研修に行ってきました。そこで大正の大震災の震度に匹敵する起震装置という実験装置があるんですね。1分40秒に近い震度6から7の横ゆれ、縦ゆれというのを体験してきたんですけど、その震度を体験すると、これじゃ道志村はとてもめっちゃめっちゃだなというようなことを、体で実験して参りました。

最近の震災の状況を見ると、橋や法面はほとんど崩落、先日の岩手宮城でも。けどトンネルが崩壊したという写真とか映像って1回も見ることがないですよ。だからこういうふうに曲がった所を多少広くするとか、橋を架けるとかという工事に大金を注ぎ込むよりも、トンネルでどーんと越えることが、費用的にも防災の面からも非常に有効な方策で、

是非やっていたらなければなど私のほうからお願いしたいなというふうに思います。

私のお願い、また別にあるんですけども。私、クラフトの会で、知事さんの目の前にある台とかを作らせていただきました。こういうものを作るのが私の本業ではなくて、本来はもっと小さいものなんですけど、要するに観光に絡んだ木工品や何か作っているんです。観光という面から道志もこれから生きていかなければならないので、これは山梨の目指しているベクトルとそんなに離れていないと思います。

道志は観光資源として日本一とか、例えば葡萄とか桃とかというようなものを持っていません。

〔知事〕

これありますけどね。クレソンとか（笑い）。

〔参加者〕

あクレソンはね。日本一ですけど（笑い）すいません。後発なものですから日本中に轟いているというレベルにはまだ行ってないと思うんですけど。じゃあ何がほかに日本中に、世間に出ていって胸を張れるのかなというと、やっぱり景観だと思うんですよね。水と山を中心にした、この景観しかないと思うんですよ。

長期総合計画を立てる時に、その景観という部分が出てきまして、その時に私申し上げたんですけど、景観に感動して写真を撮る時に、必ず電線とかそういうものが被写体として入ってきて、非常に写真とすれぱうまくない。世間ではやっていることなんですけど、例えば県庁前の平和通りとか、ああいうところに行くとき中下していますよね。ただメインストリートしか余り見たことないんですよね。

道志では何とかそれを全村的にできないかなという提案をしたんですけど、何しろ金の掛かることですよ。一村の力でそれをやるというのは非常に困難だというふうに思うわけですよ。

〔知事〕

まあ金も掛かるけれども、問題は東京電力なんですよ。東京電力とか、いわゆる電話関係の負担を求めなきゃいかんから、一定の基準がありましてね。将来例えばこのぐらいの需要がある時はやるとかいう基準があって、そこをクリアしないとやらないというはなしですよ。

しかしこの間私は香港に行ったけど、香港というのは電柱が1本もないですよ。この間、台湾の台北にも行ったけど市街地も電柱は1本もないですよ。聞いてみると、やっぱりああいう蜘蛛の巣みたいなものは取るべきだということで、どんどんやっているんですよ。ところが日本はこれをやらないんですよ。

〔参加者〕

どうなんですかね、それは東京電力さんだけじゃなくて・・・。

〔知事〕

東京電力だけじゃなくて、全国の電力会社の基準なんですね。

〔参加者〕

行政サイドからの働き掛けで何とかならないでしょうか。

〔知事〕

国レベルで話をしないと、その基準は直らないんですよね。

〔参加者〕

国まで行かないとだめなんですか。

〔知事〕

国まで行かないとだめなんです。電力関係の、要するに経済産業省と国土交通省との間である一定の基準があって、その基準に則ってやっているんですね。だからこういう田舎だと電力会社がそれだけの投資をしても余りメリットがないからということでやらないというようなことですね。

〔参加者〕

それに公費を投じてまでやるという考え方は余りないでしょうか。

〔知事〕

道路の部分は補助制度がありましてね、つぎ込むんですけど。アロケーションといって一定の費用分担をするわけですよ。道路のほうは道路でメリットがあるとして、電力会社は電力会社でやっぱり電線を取るわけですから、それに対して一定の評価がそれなりにないと、とこうなるわけです。

電力会社にしてみれば、あとのメンテナンスが大変になるんですよ。それは空中に電線があるよりはずっと大変ですからね。そういうこともあって嫌がるんですね。

けどもう香港や台湾なんかもそうやっているのに、日本はもっとやらなきゃいけないと思いますね。私も本当にそう思いますよ。こういう所とか、それから富士山麓とか。まあ富士山の世界遺産登録を目指しているんだから、やっぱりあんなに蜘蛛の巣みたいに電線があっちゃ余りうまくないですね。そう思います。

〔参加者〕

国も観光立国を目指しているじゃないですか。県もそうだし、道志村もそうだと。同じ台に乗って並んでいるんですよね。是非何とかお知恵を拝借したいと思います。

〔知事〕

それは私も是非努力しなければいかんなと思っていますね。おっしゃるとおりです。

〔参加者〕

昔俺らが商工会の青年部の時にヤマメダービーというのをやったんですよ。要するにもう、釣った数を競ったらきりが無いということで、道志には魅力的なヤマメがいるから、一匹でもいいものの写真を展示してやって、みんなで楽しんで、そして最後の竿納めの時に表彰式をやってという形で、5年間ぐらい続けたんですよね。

その時に気づいたんですが、川を見て分かるように、工事をして大体目見当で2キロぐらいがブロックで一直線になっているんですよ。ブロックというのはそこに水が止まらないんだよね。だからそこが急になり過ぎて魚が住めない。そういう河川は道志にもいっぱいあります。そしてそれがもう老朽化して、すごく川が何ていうか、景観がよくないところはかなりあるんですよ。

〔知事〕

道志川もそういう改修をかつてやったんですかね。

〔参加者〕

昔はブロックをこういうふうに並べてやったんですよ。それで最近では、それが掘れちゃったり、台風で流れたりして分離したりしているんですね。

だから今後そういうふうな河川工事とか、それから沢の工事では、そういう人工物が自然に近い人工物じゃないと、なかなか目に痛いものになっちゃうんでね。

それともう一つ、昔から感じているんだけど、農道とか、そういうものを作る時には、さっき道祖神とかの話をしてしまいましたが、やっぱり昔からの登山道、これを大事したうえで、新しい農道とか林道を作るという形でないとね、どうしても通り過ぎたり、何度も行ったり来たり、あつこの辺かなと思うとやっとなんか小さい看板が見えて・・・。そういう感じなんだよね。

こういう自然が全て観光のフィールドであるんだから、行政側でやる仕事に関してはそういうことに対して気を遣ってもらいたいというのが我々の願いですよ。

〔知事〕

公共事業もみんな自分の庭を自分で整備するように、本当に気配りをして、景観に気配りをしてやっていかなければいけませんね、こういう所はね。景観事業というのは大事だと思いますね、非常に大事です。おっしゃるとおりですね。

〔参加者〕

クラフトの会の代表をしています。私たちのやっていることを知っていただきたいと思って発言したいと思っています。知事さんの最初ごあいさつでこの村には別荘が多いということでしたが、実は私もここに来て10年なんですけど、なかなか10年住んでも道志の人と言われなくて、別荘の人といまだに言われている（笑い）。

そういうような状態なので、いかにして私たちが村民と触れ合って、溶け込んでいけるかということでクラフトの会を作りました。今17団体あります。私たちみたいによそから来て道志村に工房を持っている人たちが3分の2と、元々道志の村民でいらっしゃる方々の工房とが一緒になってクラフトの会というのを立ち上げて、この道の駅の広場で年

2回、合計4回フェアをやっています。今年の9月にもやるんですけど、ここは首都圏、神奈川、東京のほうから山中湖に行ける通り道なので、私たちの作品を展示即売したり、見てもらったりして、できるだけ観光客等の誘致をしたり、もちろん村民の方々にも見てもらうようにいろんなことをやっているんです。

そちらの入口にも私たちの作品が置いてありますので、是非それを見て帰っていただきたいんです。

[知事]

かなり売れますか。やっぱり工芸品、それからああいう陶磁器ですか。

[参加者]

あとは村でやっている草木染めとか、今日は置いていませんけどね。そういう染色関係だとか、古着を使ったりサイクルだとか、まあいろんなことをやっております。

それからもう一つ、私たち涙ぐましい努力もしているんです。(笑い) 私たちよそから来た人間は、ボランティアとして、デイサービスの車の運転サービスだとか、お年寄り、この村の人が診療に行くための運転だとか、それとか一人暮らしのお年寄りたちにお弁当を配る、そういうお手伝いをしています。そういうことをちょっとお知らせしたいと思いました。

[知事]

いやぁ本当にありがたいことですね。お葬式に参加されますか(笑い)。

[参加者]

はい。

[知事]

お葬式に参加して、2日3日一緒に手伝って、後で酒を飲めば仲良くなるんですがね。

[参加者]

ここには元々の自治会というのがあって、私たちは自治会外の間人と呼ばれているので(笑い)、なかなか古いしきたりには溶け込めないこともあるんですけど、今は努力しながらできるだけ溶け込みたいと思ってそういうこともやっています。

[参加者]

今のお話の関連なんですけど、私、前職は30年以上三多摩のほうで教員をやっていました。

ご存知かもしれませんが、東京の中でも三多摩格差という言葉がずっとありまして、教育環境も中央に比べて非常に劣悪という状態が続いていました。

ですから私、今ここに来て、もしかしたら僻村格差というものがあるんじゃないかというのをちょっと感じているわけですね。子ども一人当たりの教育費が全県的に見てどう

なのかということもそうなんですけども、子どもたちがいろんな面で選択肢がない中で、ここにいて将来図が描けるのかなという事をちらっと思うんですよ。

子どもが減る一方です。集落によっては一人もいない所もあります。私の住んでいる所は一人いるんですけども。ここで子どもをつくるっていうのも限りある話なんですけど、近隣の自治体に比べて、道志という村が非常に魅力ある所で、自然環境に恵まれた教育環境が素晴らしいねというふうになったら、家族ぐるみで来ることは夢じゃないと思うんですね。そういったことを考えていかないと、逆にどんどん減る一方で、この村自身が成り立たなくなるという方向に行かざるを得ないんじゃないかと。

実際これからは統合ですから。私たち大人が幾らしゃべっても、たかが5年、10年でいなくなっちゃうわけですから、そういうスパンで見ますと、この道志に生まれて良かった、住んで良かったというような、そういう村づくりを観光を中心にしながらやっていると。小さい村でもって職員の方はがんばっているんですよ、少数精鋭で。

ただ人数でこなさなければいけないことだって出てくるんですね。小規模校に行ってたからよく分かるんですけど、小さい学校でもやることは同じなんです。大きな学校と。ですから小さい村でもやることは一緒ということはあるので、そういう時にはお金も人も派遣したりするような、小さい村を大事にしていくという観点を持っていただきたいなということを痛切に感じます。

[知事]

なるほど。道志は今小学校は幾つありましたっけね。

[参加者]

1つです。

[知事]

1つですか。中学校も1つですね。どのぐらい子どもはいるんですか。

[参加者]

50人の100人です。

[知事]

100というのは小学校が100、中学校が50。

[参加者]

将来はもっともっと減ってくると思います。今は年間10人ぐらいしか出生がないですから。

[参加者]

10年前は20人前後生まれていたんですよ。それが10年経ったらもう10人前後になって、これまた10年経ったらもっと少なくなるんじゃないかと、そういう危惧はして



います。

〔参加者〕

私も別荘族と言われていまして、横浜から引っ越してきて7年か8年になるんですけど、横浜時代に小学校のボランティアとして、横浜布絵本グループというのに所属していて、20何年間ボランティアで絵本とか遊具とかを布で作り続けて、それをみんなに貸出ししていた、そういうグループにいたんですね。

そしてここに越してきて、自分の手持ちがいっぱいあったものですから、それを持って小学校に行って読み聞かせをやらせて下さいと言って、布絵本とかエプロンシアターとかを持って小学校に中休みの時間に遊びに行かせてもらっています。

それでその時に思ったんですけど、子どもたちがものすごくかわいいんですね。町の子とは違ってね。

〔知事〕

あんまりすれてないんだね（笑い）。

〔参加者〕

自分の子ども全然違ってね、とってもかわいくてね。本当にこのまま素直に育ててほしいなと思うんですけど。

村には図書館がないんです。それで最近特に図書館が欲しいなと思ひましてね。この間都留の図書館に本を借りに行つて来たんですけど、そこで山梨の民話とか昔話とか伝説とか、そういう子どもの本をいっぱい借りてきて今読んでいるんですけど、すごい楽しいんですね。

小学校に行ったら小学校の図書館にそういう部類の本がなくてね、それで図書館が欲しいなと今すごく思っているんですよ。村づくりというのは、やっぱり子ども育てじゃないかなと思って、誰かがおっしゃっていましたが、この村が魅力ある村になっていったら、子どももここに住んで村が発展していくんじゃないかなと思うんですけど、本当に子どもの環境というか、そういうところももうちょっと。図書館が欲しいなとすごく思います。

〔知事〕

図書館は欲しいですよ。例えば横浜市に呼び掛けて道志村に図書館を作りますから、いらぬ本を寄附して下さいといへば山ほど集まるんじゃないでしょうかね。

〔参加者〕

そういう手もありますよね。そしてそれができたらね。

〔知事〕

矢祭町（福島県の最南端の町）はそれをやっていますものね。

〔まちづくり調整室長〕

今寄附してもらっているのが、二千冊ほど久保分校のところにあって。これから活用したいなと思っています。

〔参加者〕

それができたら私は自分の布絵本を、私が死んでから布絵本をそこに置いてもらって、みんなに使用してもらいたいと思うんですね。

〔知事〕

図書館はないんですか。

〔まちづくり調整室長〕

図書館はないんです。

〔知事〕

どこか作らなきゃいかんですね。何か空いた公共施設でいいんですね、新しく作らなくていいんですからね。

〔参加者〕

図書コーナーみたいな形で、部屋を・・・。

〔参加者〕

是非欲しいですね。

〔参加者〕

プールの集会室が空いているじゃん。あそこへ図書を集めて、役場にあったあの図書、ああいう物を集めて、そして僕らも相当持っているから寄附しますよ。本当に図書館をね・・・。

〔知事〕

なるほどね。

〔参加者〕

私、道志村で間伐ボランティア団体の道っ木い〜ずの代表しております。

道っ木い〜ずというのは、横浜が道志川の間伐材を使って事業をやろうという、そういう事業が横浜と道志村との友好交流事業の一つにありまして、横浜市の職員や学校の先生、市民と一緒に道志村で間伐して、材を林道の近くまで手運搬で運んで、それから業者さんが取りに来るとい、そういったことをさせていただいています。

ここの民有林ですね、これが今見慣れている道志村の写真です。道志村が8千ヘクタールあるうち、7,400、だから約90何%が山林で、その中のさらにまた半分ぐらいが人工林です。尾根が2つあって丹沢側と、それから都留側。この尾根のところは大体横浜

市が山梨県から昔買いまして、そこは横浜市の水道局が事業として間伐している。

実はその民有林に昭和30年代ですか、杉・桧を中心とする植樹をしました。実は私道志村に交流事業で来て、平成18年に横浜市役所を退職して村の職員に迎えられて。横浜市にいて交流しようと思いましたが（笑い）、村のほうの職員で・・・。

〔知事〕

じゃあ人質で来たということですね。（爆笑）

〔参加者〕

交流のつなぎ、橋渡しをさせていただいているんですが、その時に見つけた写真、これが道志村で、ちょうどこちらの方面を撮った昭和27、8年ぐらいのものです。この中央ぐらいがこの道の駅あたりで、手前側が多分北の、県道と国道のちょうどぶつかる辺りだそうです。

ご覧になっていただいているように、かなり山も稜線がきれいに出ているんですけど、そこから見てもこの人工林がもうこんもりして、道志村は、全国どこでもそうだと思うんですけども、この人工林、さらに言えば民有林、要するに山の材がなかなかお金にならなくなり、なおかつ（山主さんが）段々高齢化して山の手入れができなくなってます。そういう中でこの民有林、人工林を手入れして、山主さんにお金落ち、なおかつ山林が整備され、最終的には道志川の水がきれいになると、その前に山林が崩壊しないようにという、そういう大それたボランティア活動をやり始めました。今は後悔半分と、もう一つはメンバーが60人ぐらいいるんですけど、ここへ来て間伐して汗かいてお風呂に入って民宿で泊まって、また次の日曜日午前中作業するという、作業の楽しみがあるということは、やっぱり道志もそうですけど、森林の癒し、それが都会の、大人にも子どもにもすごくいい影響があるということで活動を続けているんです。

実は例えば3千ヘクタールのうち、我々が年間5ヘクタール、それを年間大体300本から400本切っている程度です。

ボランティアというのはいろんな意味があって、健康のためとか、こういう村民の方たちと交流するというのもあるんですが、国の補助金、それから県の100%補助とか色々あるんですけども、残念ながら山主さんにお金落ちないということで、やっぱり木を切れないとか、切りたくないとか。ですから我々も切らせていただけますかとお願いに上がって、それからできればその木も、間伐した木なのでいただけますでしょうかと、そういう話をさせていただいています。補助制度もたくさんあるんですけど、こういう民有林に、本当に山主さんにお金落ちていくような、そういう仕組みをですね。

私たちも、山林の近くの所まで、手運搬で大変だというのが一つと。

それからもう一つは、やはり相手が50年ぐらい経っている木です。そうすると20メートルから30メートルぐらいの樹高があるので、素人ができる所とプロができる所、そういうものの仕組みをうまく作っていただいて。我々県の林業技術士のボランティアの会と今交流を図っているんですけど、今度森林総合研究所とか、それから林務事務所、そういう方たちと我々ももっと交流して、そういった仕組みが持てたらいいなというふうに思います。その2点をぜひ。

〔知事〕

そうですか、いや分かりました。

〔参加者〕

ちょっと伺いたいんですが、山梨県が全国的に見ても休耕作地が、要するに休んでいる畑ですか、かなりトップに近いというふうな話をちょっと伺ったんですね。それで解決に向けて重点目標で取り組むような話も聞いたんですけど、道志でも体験農園がありますが、結構休耕作地が多いんですね。田んぼなんかでもそうなんですけど。

ただ私もここへ来てまだ3年目なんですけど、そういう情報というんですか、空いていて借りられるとかそういう情報が、ホームページとかそういうところを見てもなかなか出てないですね。だから山梨県として取り組むのであれば、どのような取り組み方で解決していきたいのか。それはもう道志でも同じような考えをしないといけないと思うんですけど、その辺をちょっと・・・

〔農村振興課長〕

耕作放棄地は山梨県、全国的に見ても多いほうなんですよ。全国で2番目ぐらいに多いんですよ、パーセントで言うと。

それで今年1筆ごとの調査をしまして、それは市町村の役場の方に大変なご苦労を掛けるんですけど、それによりまして1筆ごとを将来的にどうしていくんだというような方向性を地主の方とか地域の方だとか、農業委員会を通じまして検討して、それで対応していくというようなことを今考えております。

何分にも難しいのは個人情報が入りますので、それをどう、例えば貸したいという人には許可を得て公開していくような方法もあるかなと検討しているところなんですけど、何しろちょっと実態が統計の数字しか分かりませんので、今年1年そういう実態調査をしていくというふうに考えています。

〔参加者〕

何かすごくもったいない感じなんですね。

〔知事〕

もったいないですね、確かに。だからクライנגルテンみたいなものにちょっと整備して、そして大いにPRをして募集すればかなりの人が来るんですよ。だからそういうものをどんどん都会の人にPRしたらいいんじゃないかと思えますね。

大体クライングルテンなんていうのはみんなPRをすれば100%埋まりますよね。特にちょっとしたコテージでも作っておけば、これは非常に需要が大きいですね。だからもしPRをしてないとすれば、ちょっとそれはもったいないですね。それはちょっと考えなければいけませんね。

〔参加者〕

ここに引っ越してきて9年目になります。仙台から大学で横浜に出て、こっちに来たんですけども、この景観とか雰囲気すごく気に入って引っ越して来たんです。とにかくこの景観を守りながら、都会から人をもっと寄せられるような、先ほどから皆さん言っているようなボランティア活動であるとか、間伐や休耕田の活用であるとか、そういうことを通して、もっと遊び心を持って、みんなで都会から人を連れて来るような、そういう活動に県のほうから支援していただければ。それほど予算はいらないと思いますので、とにかく宣伝だけなので、後ろから支援していただけるともっと良くなると思います。

〔参加者〕

道の駅から下へ6キロぐらい下ったところに河川に大きな堰堤があります。その魚道がもう4、5年くらい壊れていて、魚が、アユが登らないわけです。それで前の知事さんの時かな、何か陳情したら予算付けまでしたらしいんですよ。それが今度の知事さんになって、何も返事がないし・・・(笑い)。

〔知事〕

何ていう堰堤ですか。場所が分かりますか。

〔参加者〕

笹久根（ささくね）ですよ。

〔知事〕

笹久根の堰堤の魚道ということですね。これちょっと調べてみましょうね。

〔参加者〕

是非何とかアユが登るように、そんなに金を掛けなくも、何とかできるようにしてもらえばありがたいです。

〔知事〕

止めたわけではないから、それは多分予算付けがしてなかったということですね。調べてみます。

〔参加者〕

私は山梨県でただ一人、この間農林水産省の「農林漁家民宿お母さん百選」のほうに選ばれて、私がやってきたことに対して思いが通じたのかなというのがあります。

今都会の子どもたちというのは田舎がない子どもたちが多くて、道志村での体験学習の中で第二の故郷を感じて帰れる。そして私たちがこっちのお母さん代わりになってやっている。そういうのいいのかなと。だからもっとよくするのではなくて、道志村も環境を整えながら、道志村って、財産としてあるのは山と川だけだと思うんですよ。だからそれを私たちの手で今までのように保っていけたら、もっと都会の子どもたちに、本当の故郷、田舎を味わっていただけるのではないかなと。それでこっちに来た時に、田舎のお母

さんになれるかなと思いました。

〔知事〕

なるほど。

〔参加者〕

私もこの村の中で小さな民宿をしています。道志村と横浜市との交流の一環といたしまして、中学生の体験型学習の受入れをしていますけど、やっぱりこの自然の山でのウォーキングとか、冷たい川で水に浸かっておおはしゃぎする子どもたちの姿が常に印象に残ってしまっていて、帰りに涙して帰る生徒が結構多く見られるんです。

先週帰った生徒さん、土曜日に帰られた横浜の生徒さんなんですけど、全員の生徒さんが涙して帰ってくれて、それは自然との別れを惜しんでいるんだと思っています。

また次に夏休みに来るねと言ったり、手紙で近況報告をしてくれる生徒さんもかなりいるんです。この自然体験ができるということ、横浜だけじゃなくもっと多くの都市の地域の人に知ってもらえたらありがたいなと思っています。

〔知事〕

そうですね。

〔参加者〕

特に知事さんへということではないんですが、僕はこういう村中に住む若者として、こういう場を開いていただいたことによって、これは僕の個人的な意見ですけど、村の中に住んでいる人たちの中にも、思うところも色々違うところがあるなということをおもいました。

ですからこれから道志村を担っていく者としては、今日みたいなこういう話を聞いた中で、いろんなもの、いいものも、悪いものも、たくさん話が出てくると思うんですけど、知事さんにも陳情にお伺いするようなことになればいいなと僕は今日思いました。ありがとうございました。

〔司会〕

それでは感想も含めて、まとめのあいさつを知事からお願いします。

〔知事〕

色々貴重なお話を聞かせていただきまして本当にありがとうございました。皆さんのお話を聞いて色々感ずるところがあったんですけども、まずやっぱり多くの方々が都会からおいでいただいて、この地域を気に入っていただいて長く定住していただいて、そしてこの地域に溶け込む、そしてこの地域のためになる、そういう努力をしていただいているということは、まあ山梨もそういう町は多いんですけども、ほかの町に比べてもそういう方々が多いように思っていて、まだなかなか溶け込まないと言っていましたけど、しかしそうは言っても皆さんと一緒に、地元の皆さんと一緒にやっていただい

ているということが大変に素晴らしいことだなというふうに思いまして、これからは是非よろしくお願いをしたいというふうに思います。

それから共通して、やっぱりこの道志村の売りというのはやはりこの素晴らしい景観であって、森林であって、また川であって、これをしっかり守り、さらによくしていかなければならないという思いを強く持っておられるということに、改めて感銘を受けました。

守ると同時に、電線を地中下すとか、あるいはブロックの堰堤を直していくとか、あるいは魚道を整備すとか、そうやってできるだけ自然を復元する努力をしていかなければいかんということも認識しておられるということは、かなり考え方が進んでいるなという感じがいたしましたね。

しかし、そうは言ってもやはりこういう非常に遠隔の地域ですから、道路をはじめとする基盤整備というのがやはり生活の一番の基盤であって、これを是非一つきちっとやってもらいたいという思いは、これは切実なものとしてよく分かります。我々も努力をしなければいかんというふうに思っているわけですが、この道路については（道路特定財源の）一般財源化の問題とか、その他あって、財政的には厳しくなっているわけですがけれども、おっしゃるように、せめて観光バスがすれすれでもすれ違えるような、基幹道路はそうでなきゃならんということは思いますね、最低限のものだと思います。これは山梨県も、また神奈川県もやっていかなければならないというふうに思っております。

それから何人かの方から出ましたけれども、体験学習というようなことで子どもさんたちの教育観光といいましょうか、そういうものを大事にしておられるようですね。これはいいことだなというふうに思いますね。是非そういうものを進めていただきたいと同時に、若い人がここに定着して、この地域の子どもの笑い声が増えるようになってほしいと思いますね。

遠隔の村の中でも、例えば長野県の川上村とかはレタスですけども、そういうしっかりと食える農業があれば若い人も入ってくるんですよ。

だからやっぱり若い人がここに定着をして、子どもたちが生まれて、将来の明るい展望が開けるような村づくりをしていっていただきたいというふうに思いますし、私に色々要望があればいつでもおっしゃっていただければお会いもいたしますし、また道志の村長さんはじめ、皆さん本当にがんばっていると思いますから、村を通じてもおっしゃっていただいても、できるだけことはやらせていただきたいというふうに思っております。

大変に貴重なお話をいただいてありがとうございました。難しいこともありますけども、全体として大変に皆さん努力しながら、村づくりに向けて明るく一生懸命取り組んでいたという感じがいたしまして、大変心強く思いました。ありがとうございました。

また時々お邪魔させていただきますから、どうぞよろしくお願いたします。

〔司会〕

どうもありがとうございました。まだまだ言い足りないことたくさんあると思いますけれども、県庁に電話するなり、出先機関、それから役場を通じてでも何でも結構です。また私たちのところにはクイックアンサーという制度がありまして、ホームページからも入れますし、役場にも用紙が用意してございますので、何かありましたらそちらのほうへお願いたします。

今日はありがとうございました。